

日付:2015年10月25日／聖書:エレミヤ書20:7～9

説教:「主の言葉のゆえに・・・」

今朝の箇所は、「苦悩するエレミヤの告白」である。エレミヤは、エルサレム神殿の祭司であり、最高監督者であるパシュフルの命令によって捕らえられ、打たれ、ベニヤミンの門に拘留された。この拘留とは「晒(さら)し台に乗せられた」という意味がある。「わたしは一日中、笑いにされ／人が皆、わたしを嘲(あざけ)ります」とは、まさに神殿に来る人々の晒し者にされ、笑われたということ。何故か？それは、エレミヤが語る言葉が、宗教界の指導者であるパシュフルにとって快く思わないからである。

エレミヤの言葉は、非常に厳しくユダの王に、ユダの人々に語られた。それは、神の御心にそぐわない王が、民がいるからであり、ゆえに預言者エレミヤの厳しい言葉となる。一方、そういうエレミヤとは、一線を画す意味でもパシュフルは彼を捕らえた。常に王や人々の称賛を得て、エルサレム神殿がより栄えるためにと耳に心地よい言葉を王に、民に語ったのだ。エルサレム神殿がより栄えるために、「主の神殿、主の神殿、主の神殿」と耳に心地よい言葉を、王に、民に語ったわけである。語っていることが、神の御心であるかということよりも、人に喜ばれるかどうかを無意識のうちに選択してしまうということがあった。神殿が栄えるためにである。私たちの教会形成はどうか。教会が大きくなるために、メガ・チャーチを目指すために、神の御心よりも、人に喜ばれることを優先してはいないか。混同されてはいないか。それは、宗教家が陥りやすい一つの誘惑とも言える。

主の言葉のゆえに、私たちの働きは辛くもある。しかしまた、幸いな時もある。今朝の言葉が、そのことを垣間見せている。《・・・主の言葉のゆえに、わたしは一日中／恥とそしりを受けねばなりません・・・主の言葉は、わたしの心の中／骨の中に閉じ込められて／火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして／わたしは疲れ果てました。わたしの負けです。》「主の言葉のゆえに」苦難はある。しかし、主の言葉のゆえに、私たちの生きる道が備えられている。それは、幸いの道そのものであることをまた気づかせて頂きたい。(神谷)